

学校法人三育学院
三育学院短期大学
機関別評価結果

平成 20 年 3 月 19 日

財団法人短期大学基準協会

三育学院短期大学の概要

設置者	学校法人 三育学院
理事長名	東海林 正樹
学長名	上田 勲
A L O	東出 克己
開設年月日	昭和46年4月1日
所在地	千葉県夷隅郡大多喜町久我原1500番地

設置学科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
英語コミュニケーション学科		40
看護学科		60
	合計	100

専攻科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
専攻科	地域看護学専攻	25
	合計	25

通信教育および入学定員(募集停止を除く)

なし

機関別評価結果

三育学院短期大学は、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていることから、平成 20 年 3 月 19 日付で適格と認める。

機関別評価結果の事由

1. 総評

平成 18 年 7 月 28 日付で当該短期大学からの申請を受け、本協会は第三者評価を行ったところであるが、評価の結果、当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現および教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていると判断した。

上記の判断に至った事由は、おおよそ次の通りである。

聖書の福音を教育理念に据えた建学の精神は、極めて明確に示され、学生をはじめ、教職員への周知徹底も図られている。これに基づく教育目的・教育目標に即して教育課程が編成されている。英語コミュニケーション学科および看護学科とも、将来の進路を踏まえたファーストステップとして専門教育を位置づけている。授業内容・教育方法および評価方法については、履修要項における「講義概要」で学生に提示されているが、さらに最初の授業で詳しく説明している。また学生による授業評価は平成 11 年から実施され、授業改善に活用している。単位認定状況、授業に対する学生の満足度調査の結果から判断して、教育目標は達成されていると考えられる。

選抜方針と多様な選抜方法は、学生募集・入試ガイド、ウェブサイト、オープンキャンパスなどによって分かりやすく説明されている。特に一泊二日の体験入学を取り入れている点に当該短期大学の特色を受験生に理解してもらおう工夫が見られる。入学後も学生間あるいは学生と教員間の親密な関係を築くことができるよう十分な支援体制が作られている。

キリスト教に基づく建学の精神から、社会的活動としてボランティア活動が明確に位置づけられている。学生によるボランティア活動は、地域社会において高く評価されているにとどまらず、海外でも活発に行われている。また学生の短期留学も積極的に実施されている。

理事会・評議員会、監事は適切に機能し、学長もリーダーシップを発揮している。

素晴らしい建学の精神と、①教育共同体としてのキャンパス、②自然環境に恵まれた広大なキャンパス、③キリスト教主義教育、④少人数教育、⑤健康生活教育、⑥労作教育、⑦ボランティア活動、⑧国際的な教育ネットワークなどの特色は特筆に値する。

2. 三つの意見

(1) 特に優れた試みと評価できる事項

評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

- 「聖書の福音」が教育理念であり、教職員に対しては、学長による教員着任時のオリエンテーションと朝礼での指導が、学生に対しては入学時と週1度のアセンブリーが徹底して励行されている。

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 学生による授業評価が実習用と講義用に分けて実施され、そのいずれにおいても極めて高い評価を得ている。

評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

- クラスアドバイザーによる学習支援が充実しており、国家試験合格率も極めて高い。その結果、系列の病院・事業所などを含めて、専門職としての多様な進路があり、就職先との情報交換も活発である。

評価領域Ⅴ 学生支援

- 入学手続き者に対するオリエンテーションに1週間かけて詳しい説明を行い、入学直後には一泊二日のオリエンテーションゼミナールや教職員宅における新入生歓迎昼食会などを実施している。また在学中、学習面のみでなく学生生活でのいろいろな悩みについて相談できる体制が整備されている。

評価領域Ⅵ 研究

- 研修日は確保され、研究室も完備されており、学内教員・他校の教員・地域との共同研究も行われている。また、研究費については、「教員研究費補助規程」が整備され、公平に配分されている。

評価領域Ⅶ 社会的活動

- 町の後援を得て、毎年「世界レンゲ祭」に参加するほか、クリスマス・チャリティコンサートなど、地域の行事に参加し、学生ボランティアも文化的活動の一端を担っている。
- 留学生を受け入れたり、学生を海外系列校への短期留学や海外実習に派遣したりすることを教育の一環として取組んでいる。

評価領域Ⅷ 管理運営

- 学長からの月報の配布による問題の共有と意思統一が図られている。

評価領域Ⅹ 改革・改善

- SDA (Seventh-day Adventist) 教団の大学認可協会による12項目に及ぶ点検・評価を5年に1回の割合で行い、改善、改革を全教職員で実施している。

(2) 向上・充実のための課題

評価領域Ⅱ 教育の内容

- 公開（参観）授業、組織的なファカルティ・ディベロップメント（FD）、スタッフ・ディベロップメント（SD）活動の取組み、シラバスの改善などを図ることと、選択科目の受講者がゼロや余りにも少人数の科目を見直すことが望まれる。

評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

- 英語コミュニケーション学科においては、学生の実状に即した教育を行い、退学者対策、就職支援を強化し、看護学科においては、看護師の積極性やリーダーシップ能力の向上を推進することが望まれる。

評価領域Ⅵ 研究

- 教員の研究成果発表促進と外部資金の調達を期待したい。

評価領域Ⅷ 管理運営

- 事務部門の充実を図るとともに、事務職員も教育の担い手であるとの観点から、また職員の業務効率を改善するという観点から、SD活動の推進を期待したい。

評価領域Ⅸ 財務

- 教育研究経費の比率が低いので、教育研究条件の充実に配慮されたい。

(3) 早急に改善を要すると判断される事項

なし

3. 領域別評価結果

	評価領域	評価結果
評価領域Ⅰ	建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	合
評価領域Ⅱ	教育の内容	合
評価領域Ⅲ	教育の実施体制	合
評価領域Ⅳ	教育目標の達成度と教育の効果	合
評価領域Ⅴ	学生支援	合
評価領域Ⅵ	研究	合
評価領域Ⅶ	社会的活動	合
評価領域Ⅷ	管理運営	合
評価領域Ⅸ	財務	合
評価領域Ⅹ	改革・改善	合

評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

キリスト教精神に基づいた建学の精神・教育理念は確立され、明確に示されている。その理念に沿って調和の取れた能力を身に付けた人間教育を実現しようとしている。

この建学の精神・教育理念は、学生には入学時のオリエンテーションやアセンブリで、また教職員については全学礼拝や朝礼で周知を図っており評価できる。しかし年々多様化する学生が、建学の精神・教育理念を自らの人格形成と関わって実践できているのか、また個々の教職員がこの精神をどのように具現化し、自己啓発や学生指導にいかしているのかを常時検証し、改善向上していく努力を継続されたい。

評価領域Ⅱ 教育の内容

建学の精神に基づく各学科の教育目的・教育目標の具現化や、社会のニーズに対応するために、カリキュラムは体系的に編成されている。英語コミュニケーション学科および看護学科とも、将来の進路を踏まえたファーストステップとして専門科目を位置づけている。授業内容、教育方法、評価方法の学生への明示などについて努力が払われ、相応の効果をあげている。しかし、教育内容のさらなる充実のためには、①特色化、魅力化、②カリキュラムの改革、③学習支援体制の充実、④FD・SD 活動の推進、⑤資格取得の支援、⑥単位互換の実施などをより一層推進することが望まれる。

評価領域Ⅲ 教育の実施体制

教員数は短期大学設置基準を充たしているが、年齢構成が高めに偏っている感がある。教員の研究室、機器、備品、図書、担当コマ数、研修日などには充分配慮されている。また教員間の意志疎通の努力がみられる。

教育環境は、広大な敷地、校舎、実習室、施設設備ともよく整備され、機能的に運用され、その教育効果が発揮されている。全寮制を敷いている上、教職員も大学の近隣地区に起居しているため、学生の名前と顔を覚え、学習、進路、悩み・不安等の相談に大学全体として対応している。図書館には学内 LAN や他の図書館との協力体制も整備されている。

評価領域Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

各学科とも、多様化した学生に対応するために、全体指導や個別指導を時宜に応じて実施しており、その結果、単位認定の状況、授業に対する満足度も良好である。また国家試験対策については、担当教員が共通認識を高め、教授方法の改善のために努力しているが、合格率 100%に向けて、より一層の努力を望みたい。

看護学科と専攻科の専門職への就職率は極めて高い。特に系列病院が多いので就職後の意見聴取も容易であり、その問題点を改善し、授業にフィードバックし成果をあげている。

看護学科・専攻科については、教育目標をほぼ達成していると思われるが、英語コミュニケーション学科については、きめ細かな指導にもかかわらず退学者が多いのは、学科への不適應なのか、学力不足によるのかを明確にし、改善策を講ずることが必要である。

今後は、組織的に卒業生との交流の場を設けることや、卒業生の追跡調査を実施することも望まれる。

評価領域Ⅴ 学生支援

教職員と学生との触れ合いを含むキャンパスライフのすべてが「人格陶冶の場」になっている雰囲気があり、高く評価できる。入学希望者に対する説明も具体的で明確であり、入学後における学習、生活、進路などの指導も行き届いていて、学生の満足度も向上が認められる。

評価領域Ⅵ 研究

研究活動のための諸条件は確保されている。教員個々の研究活動に加えて、教員間や他学科との共同研究、あるいは他校教員との共同研究なども行われている。ただし必ずしも組織的な取組みとはいえ、教員間に偏りがある。その改善とともに、科学研究費補助金への申請・採択件数の増加や、他の外部資金の獲得に向けて努力することに期待したい。また紀要やそれ以外の媒体を通じて各教員の研究活動を公開する取組みを推進すれば、研究活動の活性化につながり、大学の評価にも反映される。

評価領域Ⅶ 社会的活動

社会的活動は、建学の精神に基づく位置づけが明確であり、全学で積極的に取り組んでおり、高く評価できる。

開かれた大学の実践のために、社会人学生の受け入れ、地域住民との連携によるパソコン講座、ホームヘルパー講座、地域の要請に応じた教員の講演などを行っている。また地域の諸行事への参加、地域施設での定期的ボランティア活動、全学奉仕日を設けた地域活動などを通じて地域の活性化に貢献するとともに、学生の成長に大きな影響を与えている。

さらに国際交流・協力への取り組みも盛んである。学生主体のボランティア活動であるアジアの国々との交流援助は、SDA 教団や国際ソロプチミストなどの資金協力を得て、医療ボランティアの領域にも及び、20年以上の歴史を背景に現在も継続している。

評価領域Ⅷ 管理運営

経営主体としての理事会と教学主体としての教授会の意思疎通は図られており問題はない。しかし、FD・SD 活動に関しては、今後に期待したい。また、学外からの評価・意見を取り入れるシステムの構築が望まれる。

評価領域Ⅸ 財務

現状においては健全であるが、定員充足率の今後の動向によっては、前途に大変厳しい状況も予測される。経営サイドと教学サイドが一体となった全学的な協力体制を構築し、大学の存続と発展に向けて努力することが必要である。

評価領域Ⅹ 改革・改善

設置母体である SDA 教団本部の点検・評価の際も、教育のみならず大学全体の問題点を指摘され、改善・改革に務めているが、その結果はまだ必ずしも満足できるものではない。

現在の厳しい状況下における改革・改善の方向としては、①建学の精神の時代状況に即した具現化、②特色ある個性的な教育、③他の教育機関や行政機関との連携、④生涯学習社会に対応した教育、⑤教育水準の維持向上などが挙げられる。これらの実現に向けて一層の改革・改善が望まれる。